

非核奈良

元唐招提寺長老 森本孝順師筆

2012年
8月15日
第100号

発行 非核の政府を求めらる奈良の会

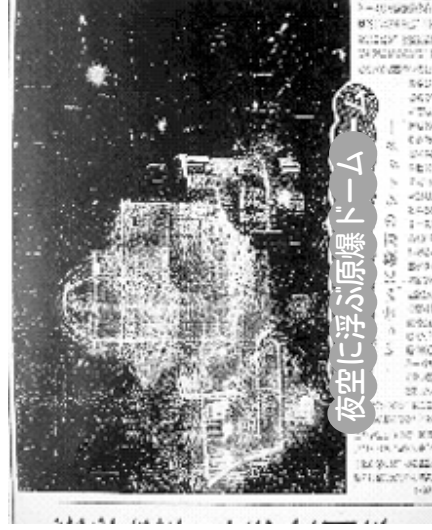
〒630-8213 奈良市登大路町3-6 大和ビル4F

奈良合同法律事務所 気付

電話0742-26-2457 FAX26-3010 郵便振替01020-1-56459

100号記念 特別号

創立以来休みなく3ヶ月ごとに
発行してきました



(1956年5月28日付朝日新聞朝刊)

一枚の新聞写真から メディアの責任を思つ

元朝日新聞大阪本社編集局長 長谷川千秋

「夜空に浮ぶ原爆ドーム」と見出しのついた一枚の新聞写真。最近、新聞社の後輩が送ってきてくれた1956年(昭和31年)5月28日付朝日新聞朝刊社会面トップ扱いのこの紙面を見て、私は打ちのめされたような気持ちになりました。2011年3月11日の東日本大震災とともに引き起こされた人災、東京電力福島第1原子力発電所事故によって、原発の「安全神話」は崩壊。この神話づくりに日本のメディアが加担して

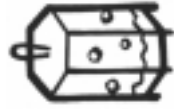
きた事実も明らかになってきました。それはアメリカの世界戦略のもとで、日本への原発導入キャンペーン時からすでに始まり、新聞界では故・正力松太郎・読売新聞社主が深く関与した「原子力平和利用博覧会」が1955年11月の東京を皮切りに57年夏まで全国各地で、それぞれの地域に影響力の強い新聞社が主催者の一員に組み込まれて展開され、計260万人を集めたといえます。

被爆地広島では中国新聞などが主催。写真材料商組合が行った記念イベント・夜間撮影会のために閃光電球1万個で原爆ドームをライトアップした56年5月27日、まさにこの日に原子力平和利用博覧会が広島平和記念資料館(原爆資料館)で始まったのです。被爆の実相を示すすべての展示資料が22日間の期間中、館外に移され、実験用原子炉の実物大模型をはじめ博覧会展示品にとって代えられました。原爆ドームは、「電気を生み出す原子力」のPRに利用されたのです。

京都、大阪では朝日新聞などが主

権。派手な紙面扱いでした。1960年に入社した私は、1人のジャーナリストとして、核兵器にも原発にも反対する市民の目線を大事に報道に携わってきたはずでしたが、いま振り返ると「平和利用」の危険性について本質的、構造的に突き詰めて考えることができなかった力不足を痛感するばかりです。せめて外野席からそのことを現役の仲間たちに伝えていこうと思っています。

新聞社を卒業後、一市民として近畿の被爆者の原爆症認定訴訟傍聴支援のため大阪の裁判所に通い、裁判傍聴日誌を発信し続けて10年目になりました。いま若者たちの間に広がっている「微力だが無力ではない」という言葉が私は好きです。調べたら「高校生平和大使・高校生1万人署名活動」の合言葉でした。長ければいいというものではありませんが、若者の合言葉をかみしめこれからも頑張ります。「非核奈良」の第100号発行おめでとうございます。これからも「非核奈良」が粘り強く号を積み上げていかれることを心から祈念します。



非核奈良の会二五年と

『非核奈良』一〇〇号

―私的回顧―

奈良女子大学名誉教授
奈良非核の会前代表

中塚 明

◆世界にこだまする「反核平和」の 声―第二回国連軍縮総会

◇一九八二年、第二回国連軍縮総会に私は日本科学者会議の代表団に加わって参加することになりましたが、アメリカに入国するのが一苦勞。日本の反核運動にアメリカ政府が干渉、参加者を選別、私たちは東京に足止めされ、アメリカ大使館に抗議、遅れてニューヨークに到着しました。

◇しかしニューヨークでは、核兵器ノー！の声充満。一〇〇万人のデモ。アメリカ政府の干渉を圧倒しました。こうして世界人民の力が米ソ核大国を動かします。

◇世界人民の声が、核大国の手を縛りはじめる―その状況のもとで、日本でも核兵器の全面的な禁止を実行する政府を實現しようではないか！という動きが、「非核の政府を求める会」運動の出発になったと思います。

結成総会

◇非核の政府を求める奈良の会は一九八七年七月四日結成。沼田稲次郎（東京都立大学名誉教授）非核の政府を求める会常任世話人が「いまなぜ非核の政府か」と題して記念講演。「今、核兵器は都市抹殺という段階ではなく、人類を抹殺し、人類存亡の問題である。自国民をも殺害することが明らか核兵器をもつことはいかなる国の政府にも許されない。主権者として、思想・信仰・信条をこえて非核の政府を求めていけば、いま、可能性がある」と訴えられました。

『非核奈良』

◇一四二名で出発した会は一九八七年十一月五日『非核奈良』第一号を刊行。会員は一年後には三七〇名に。『非核奈良』はそれから年四回発行を守り、また年二回の「非核平和の集い」を続けてきました。

「非核平和の集い」

◇夏と十二月に催してきた集いのテーマとお話くださった方をすべてあげておきます。（紙面の都合で講演者の肩書や同時に行われた演奏などは省略。年の前が夏の総会時、後が一二月の集いです）。

◆ひたむきに前を向いての一〇年

一九八七年から一九九六年まで

◇唐招提寺、森本孝順長老の教え―奈良で人類史に関わるような運動をするとき、仏教界のお力添えは欠かせません。非核奈良の会の歴史でもそのお力は大きなものでありました。とりわけ唐招提寺長老森本孝順さんは『非核奈良』の題字を書いてくださり、お亡くなりになった今でも、私たちを励まし続けておられます。第三回総会（一九八九年）を唐招提寺でさせていただきます。そのとき御影堂で東山魁夷の襖絵を背にして、鑑真が日本に来るまで二二年の歳月がかかっていることを話され、長期にわたる核兵器廃絶の道を説かれました。

一九八七年

・増田善信：「黒い雨」から「核の冬」まで

八八年

・安斎育郎：地球から核兵器はなくせるか

・黒川万千代：鳩の使いの旅

八九年

・黒田了一：人類の未来を語る

・野原全勝：この沖縄 この日本―核戦争基地沖縄の現実を語る

九〇年

・山口男子：人間として生きる―核兵器とは共存できない

・浅井基文：どうする日本の平和を―イラク問題と日本のゆくえ

九一年

・後宮俊夫：湾岸戦争から考えさせられること

・直木孝次郎：開戦の前夜を憶う

九二年

・沢田昭一：核兵器をなくすのは、今！

・千田夏光：従軍慰安婦の今日的な問題

九三年

・中島篤之助：核兵器をこうしてなくそう！

・門脇禎二：戦争と人間―一五〇年前の戦場体験から

九四年

・渡辺洋三：核兵器廃絶と日本の政府

・中塚明：日清戦争一〇〇年、太平洋戦争五〇年

九五年

・旭堂南北：ひとり語り―ひろしま

・佐原真：考古学者が戦争と平和を語る―初め戦争はなかった

九六年

・宮城喜久子：沖縄の女たちのいまは

・西澤邦輔：ケロイドを病む魂

* 九五年には他団体の協力を得て

「ピースコンサート・イン奈良」
開催

◆創意・新風が活力に

一九九七年から二〇〇六年まで

◇一九九七年六月議会で奈良県下全自治体の「非核平和宣言」が実現しました。非核奈良の会活動は、よくいえば倦まずたゆまず、かたやマンネリにおちいりかねない危機をはらみながらの状態。総会が一〇名こそそこという年もありました。しかしさまざまに創意をつくして、地道に草の根の活動をしてこられた方々のご参加によって、新風・活力が非核の会にそそぎこまれました。『非核奈良』が五六号からA4版に。非核平和の集いの講師にもいっそう多彩な方々をお招きできるようになり、二〇〇四年六月には非核奈良の会のホームページも開かれました。

一九九七年

- ・伊東壮：ヒロシマから二一世紀の世界にむけて
- ・岩井忠熊：歴史学と歴史教育の分断は何をもたらすか

九八年

- ・西晃：沖縄反戦地主から学ぶこと
- ・信太正道：元自衛官が語る「軍隊の「タテマエ」と「ホンネ」

九九年

- ・長友恒人：国家の犯罪核兵器開発
- ・増田れい子：戦争の世紀を終わらせるために

二〇〇〇年

- ・安齋育郎：世界の反核運動と日米密約
- ・宮城晴美：母の遺言―沖縄戦の「集団自決」を語り現代の沖縄を問う

〇一年

- ・永田忍：核抑止論批判と核兵器廃絶への新しい動き
- ・笠木透と雑花塾：私は忘れない

〇二年

- ・澁谷昇：アフガニスタンに義肢を送ろう
- ・河辺一郎：アメリカ外交と日本の外交

〇三年

- ・直木孝次郎：正義と戦争―その真実を考える
- ・児玉房子：いま軍隊をすてた国―コスタリカに学ぶ

〇四年

- ・川崎哲：軍縮の風は起こせるか
- ・本島等：二一世紀を生きるあなたに『アジア・太平洋戦争の後遺症』

〇五年

- ・山本真理子：平和の種をまく
- ・肥田舜太郎：未来への伝言―被爆者として、被爆者治療に携わってきた医師として

〇六年

- ・平尾道雄：米原市長の平和トーク小さなまちから平和への一歩を
 - ・品川正治：「戦争・人間、そして憲法九条」―戦争を始めるのも人間なら戦争を止めるのも人間
- * 九八年には早坂暁さんの講演と映画「夏少女」の上映

◆明日につながる最近の五年

二〇〇七年から二〇一二年まで

◇それにしてもチェルノブイリの大事故は、非核奈良の会結成一年前のことでした。なぜ、このことが私たちの間で、議論にならなかったのか。暮らしのあり方・ものの考え方・日本の過去をどう記憶するのかなど、再考・再思しなければならぬ問題はいっぱいです。日本という国、明治以後、朝鮮を奪取し、中国をはじめアジアの国々を侵略し、その結果、散々に敗北。それなのにその侵略の根幹をなした「国体を護持」してあやまないこの日本という国。楽観できる材料は何一つないと私には思えます。行き先を

変えるのは私たち一人ひとり、そしてその力の結集です。非核奈良の会の健闘を祈りつつ……。

二〇〇七年

- ・長谷川千秋：施行六〇年の憲法記念日を日本のマスコミはどう迎えてきたか
- ・内村千尋：沖縄の戦後史と今

〇八年

- ・中村桂子：アメリカの核戦略に取り込まれる日本
- ・宇吹暁：歴史化するヒロシマ・記憶と継承

〇九年

- ・波佐場清：北朝鮮が核を捨てる日
- ・望田幸男：ドイツにおける「過去の克服」の条件と葛藤―日本と対比しつつ

一〇年

- ・花垣ルミ：死んで無念、生きて無念の原子爆弾（紙芝居も）
- ・安川寿之輔：「暗い昭和」につながる「明るくない明治」

一一年

- ・豊下梢彦：福島原発から核兵器を問う
- ・井戸謙一：原発問題と裁判所

一二年

- ・木村俊雄：東日本大震災と原発事故から学ぶ

『非核奈良』100号発刊を記念して

平和行政の推進

広陵町長 平岡 仁

「非核奈良」100号記念号の発刊おめでとうございます。これまで編集に携われた多くの皆様のご尽力と、貴会のこれまでの取り組みによる多大な成果に対して心から敬意を表します。

平成21年4月、アメリカのオバマ大統領がプラハにて「核兵器のない世界」を目指すと演説しました。核超大国アメリカが、核兵器廃絶に向けてようやく一步を踏み出した歴史的な瞬間であり、日本の反核の訴えが国際政治のリーダーを動かすに至りました。

しかし、その後も北朝鮮の核実験や、アメリカによる新型の核性能実験が行われており、依然として核の脅威が存在していることは誠に残念なことであります。

広陵町においては、昭和60年に「核兵器廃絶平和宣言」を行い、平

和実現のため各種の施策を実施してきました。近年では、「平和市長会議」や「非核宣言自治体協議会」に加盟し、他の自治体とも手を携えて平和事業の推進を行っているところです。

世界の恒久平和と安全は人類共通の願いです。我が国は、世界唯一の被爆国として、核兵器の開発・実験のすべての廃絶を訴え、国際社会を導く役割を果たさなければなりません。日本が動かなければ、世界は動きません。平和を脅かす核兵器の廃絶に向け、小さな町ですが、住民と行政が一丸となって平和啓発活動を広げていく所存です。

結びに、今回の100号発刊を契機に「非核の政府を求める奈良の会」の更なる活躍を期待するとともに、皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。



北東アジアを

非核兵器地帯に

大久保哲夫

『非核奈良』100号おめでとうございます。いつも美しいレイアウトで充実した内容の記事をお届けいただきありがとうございます。

会発足のときニュースは年4回発行とありますのでもう25年になるですね。継続は力なりと申しますが事務局の皆さま・常任世話人の皆さまほんとうによくやってくられました。

会発足の呼びかけ人のなかに奈良らしく宗教家のかたがたもおられ、初めのころは例会も教会やお寺でもたれたこともありました。いちばん強く印象に残っているのは唐招提寺で森本長老のお話を伺い、東山魁夷画伯の障壁画を拝見した例会です。

私は8年前から「九条の会・奈良」のお世話をさせていただいています。会員制ではありませんので会の運営

は緩やかですが憲法記念日のある5月の憲法講座だけは毎年続けてきました。

去年はNPO法人ピースボート特別顧問の梅林宏道氏をお招きし、「北東アジアの非核・平和と日本国憲法」という演題でお話いただきました。内容からして御会とご一緒したらよかったとあとで悔みました。

結論はいま地球上には7つの非核兵器地帯がある、北東アジアを非核兵器地帯にするため日本国政府を動かしていこう、そのためには全国全自治体の8割を占める非核宣言自治体に働きかけようというものでした。

今、非核の政府実現

のチャンス

檀原市 南浦 育弘(66才)

『非核奈良』100号記念号の発刊、おめでとうございます。

日米安保条約の縛りのもと、米軍による普天間基地へのオスプレイの強行配備がされようとしています。沖縄をはじめ、全国で配備反対の運動が盛り上がるオスプレイは、「核兵器は、持ちこませず」という非核三原則に抵触するかもしれません。

ところで、日本の原発での濃縮ウラン²³⁵や副産物のプルトニウムは、核兵器製造に直結する恐ろしい代物なのです。

2012年6月放映のNHKスペシャル「核燃料サイクルの50年」では、危険と引き換えの安易な無限のエネルギーを夢見た、当時の官僚の苦悩ぶりが見事に再現されていました。

異質な危険を伴う原発政策は「あとは野となれ山となれ」と言わんばかりの財界・電力企業の意のままではよいのか、と静かに問う時宜にかなった好番組でした。

2011年3月の東北日本大震災と福島第一原発事故を受けて、日本の原発の「安全神話」は見事に崩れました。

この原発事故を受けて、核燃料サイクルの根本的見直しが迫られています。ドイツのメルケル政権は、国民の大きな不安を考慮して、早々と原発からの完全撤退を決めました。

「非核の政府を求める会」は、この間、「核兵器は作らず、持たず、持ちこませず」という非核三原則の厳守を目指してこられました。そし

て、「日本を核戦場化に導くいっさいの措置に反対」を貫いてこられました。

1980年の社公合意の右転落路線のもと、日本を核戦場にする危険な方向へ導こうとしている自公とその後の民主党政権に代わって、非核・平和の強大な戦線をつくって、非核の政府をつくろうと励んでこられました。

「非核の政府を求める奈良の会」の四半世紀の地味な粘り強い取り組みもあって、今、日本の普通の人々の、ツイッター呼びかけによる自然発生的な行動が巻き起こっています。20万人もの人たちが毎週末に大飯原発再稼働反対デモで、首相官邸を取り囲んでいるのです。なんとも頼もしい限りです。ドイツにできて、被爆国の日本に原発撤退が決断できないはずはありません。

被爆国日本の現状に目覚めた国民に依拠して、今こそ、「非核の政府」の実現に大きく近づくチャンスかもしれません。

いままさに脚光を浴びようとしている『非核奈良』のますますの発展を祈念いたします。



「非核活動」は うたごえ運動と共に 斑鳩町 緒方雄一郎(79歳)

非核奈良については、私自身が平常の活動をほとんどしていないので、発言力はあまりないのであるが、しかし、昨今の政府民主党の危機的な状況を見るにつけ、ここらでみんなに危険信号を声を大にして発言しなければいかんと私は考えるようになりました。

野田総理大臣は、鈍感で少し頭の良くないような政治家としてマスコミを主に喧伝されています。ところが、しかしながら私の見るところ、決してそんなのではない。むしろ、隠謀家であろう。自民党内閣でもなしえなかった増税を今回絶対多数で賛成せしめた。そしてまた、極めて重要なことであるが、憲法を、つまり世界に冠たる「戦争をしない規程のある平和憲法」をアメリカ軍極東

作戦を容易にするために最大限、これに協力して平和憲法の定めを無視しようと努力している。6月末から7月16日にかけて東京の国民一般大衆のデモ行進を、極力些少な出来事として処理したかっただろう。一部報道機関(読売・産経各紙)をバックに何か昭和18年頃の気持ちの悪さである。そして最も危ない方針は、大飯原発再稼働の進め方は、極して言うならば、核戦力を今後とも日本国としては、維持していくという「原子力軍事活用方程式」の厳守というアメリカ絶対支持の、政府施策推進方程式ということが、深部で確認されていることだ。

私は7月16日の「さよなら原発10万人集会」の一環として奈良市内で開催された「奈良地区反対集会」にコーラスをやっている親しい仲間と一緒に参加した。真夏の太陽の下でJR奈良駅前から関電奈良支店前集会を経由して、奈良公園までシェパレヒコールと「青い空を」「放射能」の二曲を主に大声で行進した。

特に「放射能」という曲は福島罹災者である和合亮一氏作詞を新実徳英氏が名曲に仕上げたとでも分かり

やすい歌である。

♪放射能がふっています。静かな静かな夜です。この震災は何を私たちに教えたのか。教えたものがないのなら尚更何を信じればよいのか。屋外から戻ったら髪と手と顔を洗いなさいと、教えられました。私たちにはそれを洗う水などないので！す♪

今、この歌を思い出して歌っていると自然に涙がこみあげてくる感じですか。

今こそ『非核平和』の声を もっと広く、高く！

三郷町 上野 晃

今から一四四年前の一八六八年、日本は封建時代から抜け出る明治維新を迎えます。武士の支配する国から、「平民」の国に社会の体制が変わったのです。

しかし、この新しい社会の指導者となったのは、確かに武士ではなく「平民」でしたが、ただの平民ではなく、お金を持っている平民、財産を持っている平民、資本主義社会の成功者である資本家でした。国民の多くは、この資本家の下で、安い賃

金で働く労働者となりました。

明治以後の「近代日本」は、江戸時代の士農工商という身分をなくしましたが、代わりに労働者と資本家という「階級」ができました。江戸時代の「身分」と違って、一生進歩変わらないものではなく、労働者として人生を出発した者が成功して資本家になる場合もあるし、資本家の家に生まれた者が財産を失って労働者になる場合もあります。

第二次世界大戦の起こる以前の昭和一ケタの時代に、「無産者」という言葉で労働者階級を指していましたが、財産のない人を指す言葉でした。

一九四五年〓昭和二〇年、中国や東南アジアの軍事支配を目指した軍国主義日本が戦争に敗北し、日本の支配体制は、日本の軍事占領者アメリカの監督下に置かれました。

戦犯〓戦争犯罪者の摘発と公職追放を経て、「平和な日本の国づくり」が日本国民全体の熱烈な願いとなり、戦後日本の復興の原動力となりました。

新しい日本国憲法〓平和憲法がつけられ、国民の選挙によって政治家

が選出される時代になりました。有権者である国民が、一人ひとりの有権者〓国民が、政治家を選ぶのです。これからの日本国民の暮らし、社会の安定した発展に向けて何をしたいか、核開発という言葉があるが、核兵器のない社会をどうしてつくっていくのか。

未来に向かっての進路を決めるのは、私たち一人ひとりの有権者です。『非核平和』の日本と世界をつくるために大きな目を開けて、しっかり前を見て、一步一步前に進みましょう。



「慰安婦」問題と原子力問題

奈良市 中田 郁江

去る6月2日に兵庫のNHK問題を考える会主催の「消された被爆の真実」"もと漁師が語るビキニ核実験と福島原発"というつどいがありました。

お話は元第五福竜丸乗組員の大石又七さん、聞き手が元NHKチーフプロデューサーの永田浩三さん（現

武蔵大学教授）でした。あいにく、大石さんが体調を崩されていたので、この日は聞き役の永田さんが大石さんの名代の役としてお話をされました。

冒頭、永田さんは「E T V 2 0 0 1」の番組組変更事件の当事者として、「慰安婦」問題と原子力問題とは共通するところが多いのでは、と話されました。そして、大石さんが一番伝えたいことは、1954年のビキニ水爆実験の被害を隠す一方で原子力開発に舵を切ったことでした。

58年前、アメリカ軍がビキニ環礁で巨大な水爆実験を行い、死の灰、放射能を大気圏に太平洋にまきちらし、1000隻に及ぶ漁船が放射能を浴び内部被爆をした。そして世界中からは反対運動がわき起こり、その恐ろしさを身をもって体験した漁師たちが警告をしたが、日本政府は「核実験続行の妨げになると、わずか9か月で調査も検査もせず政治決着を結び、反対運動も握りつぶした」と大石さんのお話でした。

永田さんのお話は続きます。「E T V 2 0 0 1」シリーズ戦争をどう裁

くか、第2回問われる戦時性暴力」(2001・1・30放送)が、放送直前に大幅に改変されたが、この時永田さんは、NHKプロデューサーとして番組担当者であった。しかし、放送前日、国会議員に面会したNHK幹部が番組の大幅な改変、すなわち、

- 慰安婦、慰安所の存在を極力消す。
- 日本軍・日本政府の組織的関与のニュアンスを消す。
- 女性国際法廷の歴史的意義を消す、などを指示し、1月30日の放送当日、さらに中国と東チモール元慰安婦や加害兵士の証言も削除されたという。

最後に永田さんは、再度水爆実験の被害の実態を隠しながら原子力開発に舵を切ったことに対する大石さんの怒りを訴え、そしてEITV2001改変事件を闇に葬ることは、全く同じ体質から出ていること、そして原発に関する報道の中にも、これらの事実も真実も隠蔽する報道かどうかを見極め、はね返し、人間の顔をした未来に責任をもつ科学であり、メディアであることを強く訴えられ、共感の想いも強く“つどい”を終えました。

100号記念号に寄せて

今中せつ子

先の「非核の政府を求める奈良の会」の総会で、全国医連理事の肥田医師の講演記録を購入した。現在94歳の氏は広島で被爆され、今では日本で生き残っている医師は一人になったといわれている。

実際原爆を浴び、人間の外部と内部の被曝の実態とつきあってこられて、福島原発事故は、あの原爆と今回の原発事故とは、残酷な被害の根は一緒だと警告を発しておられます。特に内部被曝の危険について、多くの住民、明日を担う子供達の命と健康を思うと、氏の講演文面から凍りつくような恐ろしさを感じ、同時に早々と「原発収束宣言」までした政府に憤りを感じる。この事故を絶対に風化させてはならない。

それにしても、政権党の一連の公約投げ捨ては、何という国民への裏切りか。原発にしても、消費税、TPP、オスプレー問題等々、その他どれをとっても公約破りははなはだしい。高齢者の命と暮らしを支えるべく、後期高齢者の医療制度は廃止するはずが、ますます高齢者を苦し

め、長生きを喜び合える社会から遠ざけているのではないか。

今回の100号を機に、平和と暮らし、憲法を守る運動をより広く大きくしたいですね。



女性たちの力を一つにして

新日本婦人の会奈良本部

会長 田中千賀子

100号記念おめでとうございませう。

「わたしたち婦人は誰でもみじめな戦争に夫や子どもをさらしたくないと固く考えています」と新婦人の創立をよびかけ、その第一の目的に

「核戦争の危険から女性と子どもの生命をまもりまします」をかかげて今日まで活動を続け、今年50周年を迎えました。

核兵器廃絶の運動を草の根にと、折り鶴を折り、反核署名を集めSSDI(第一回国連軍縮特別総会)に吉田トヨ子代表委員を送り、SSDIIでは「予言」や「人間をかえせ」の上映を、その間、広島・岩国平和

ツアーや反核班宣言を並び、SSDIIIでは沖縄平和ツアーや折り鶴でタペストリーづくり(この図柄でテレホンカードをつくる)にとりくみましました。また、「ヒロシマ・ナガサキからのアピール」署名は奈良県6万目標をかかげ、三年目の第一「平和の波」で目標を達成しました。また、「愛と平和のフェスティバル」を開催し、鯉のうろこに非核五項目(核戦争阻止・核兵器廃絶を緊急課題としてとりくむ等)賛同署名で5メートルの鯉二匹のタペストリーを制作し、舞台にかかげました。

平和を願う女性たちの力を一つに、戦争への道をストップさせようと各界女性104人による「平和アピール」と合わせ「女性アピール賛同奈良の会」の意見広告を朝日新聞奈良版に掲載し、憲法改悪に反対し「女性NARA九条の会」を結成しました。

新婦人創立40周年には、全班で憲法タペストリーづくりにとりくみ、有事法制ノートの「意見ポスター」を作成しました。

新婦人の各地の班での戦争体験を語る会、戦時食づくりなど、平和の願いは戦争体験をもつ先輩会員から

若い会員に語られ引きつがれていきま
す。「はだしのゲン」「ガラスのうさぎ」
「太陽の子」の地域上映会や他団体
と共にとりくむ戦争展、修学旅行を
広島、長崎へとよびかけ、子どもたち
にも平和の心を伝えてきました。

原水禁世界大会や「女性のつどい」
には毎年代表派遣し、ニューヨーク
で開催されたNPT再検討会議にも
代表2名を送ることができました。
各地でとりくむ毎月の「6・9行動」
が定着しています。また、平和行進
には、リズム小組の親子が参加し、
平和のバトンが若い世代に引きつが
れています。

青い地球を子どもたちに手わたす
ため、非核の政府の一日も早い実現
をめざし共に力をあわせましょう。

節目の時に

木村 寿子

1964年、アメリカがトンキン
湾事件を起こした頃、伊江島では米
軍による雨が降るように激しい原爆
投下訓練が行われていたそうです。
伊江島わびあいの里の資料館に残さ
れている模擬原爆は、意外に小さく
白い華奢な感じのするものでした。

ヴェトナム戦争のとき、原爆が使
われたという話は当時真偽がはつき
りしないまま噂になっていました。
結局原爆は落とされることはありません
でしたが、沖縄で実践しながら
の訓練がされていたこと、このこと
は阿波根昌鴻さんの著書にあります
が、一般に余り問題にされることは
ありませんでした。

同様に原発を日本で始めたそもそ
もはエネルギー問題ではなく、日本の
核武装という側面があったということ
も非核・反原発運動の過程で余り意
識されてこなかったように思います。

核兵器に関して、日本が世界で最
も危険な国と言われるようになった
のは大分前からのように記憶してい
ますが、気がついたら既に日本は長
崎型原爆約6000発分の原発由来
のプルトニウムを持ち、しかも潜在
的核保有国としての法律まで出来て
いるという事態になっていました。

長年沢山の人々が核廃絶、反原発
への努力を熱心に重ねてきました。
しかし、今このような現状にありま
す。私達の運動以上にアメリカの力
が強く政府も財界もそれに追隨した
からでしょうが、それだけだったの

でしょうか。

目立たない動き、別な形をとって
現れたこと、直接関係がないと思っ
ているところで起きている変化に鈍
感すぎたことはなかったでしょうか。
縦でなく横のつながりにも注意深か
たでしょうか。もしかしたら官僚機
構のような体質を、DNAとして私
達は持っているのかもしれないと不
安です。そういえば官僚という組織
は、密やかに何をどんな風に動かし
ているのでしょうか。

いろんな意味で節目の時に、もっ
と感性を磨き柔軟な発想と方法で新
たな非核への道を探り出さねばなら
ないと感じています。

奈良非核の会の

存在意義を考える

岡谷よし子

この会にかかわらせていただいで
から、まだ日も浅いのですが、25年
前の設立趣旨を読ませていただき、
核兵器の廃絶と世界平和を願う熱い
思いの市民運動に感動を覚えます。
年二回の非核平和の集いを企画運営
する中で、どれほど多彩なゲストを
招き、核のない社会を多面的に検証

してきたか、奈良で唯一の貴重な会
だと再認識しました。しかし25年前
と比べて、核のない社会へ転換を遂
げたかということそうではありません。
まだそのプロセスの途中にあるので
す。世界には核を持ってよい国と持っ
てはいけない国があるという不平等
があります。核不拡散ではなく、核
全廃を目指し会の存在意義は益々大
きくなっています。

また3・11以降、原発もその範疇
に入るということも議論を深めまし
た。今後、核兵器も原発もない世界
が実現し、この会の存在意義がなく
なり、設立50年を迎えるまでにめで
たく解散できますように、切に願ひ
ます。そのために微力を尽くしたい
と思います。

私たちは非核の五項目を 実行する政府を求めます

- ① 全人類共通の緊急課題として核戦争
防止、核兵器廃絶の実現を求めめる
- ② 国是とされる非核三原則を厳守する
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を
阻止する
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定
する
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合
意にもとづいて国際連帯を強化する

盛会だった奈良の総会・ 非核平和の集い

非核の政府を求める奈良の会は、去る7月7日、総会と非核の集いを奈良商工会議所で開催しました。

総会の情勢報告では、今後ますます「核抑止論」の克服と、核兵器廃絶に向けた主体的行動を日本政府に求めていく必要性が指摘されました。また、「核」の推進勢力によって、原子力基本法の原子力利用の目的に「我が国の安全保障に資する」の一文が盛り込まれ、軍事利用に道を開く改悪がなされたことが議論され、会として抗議の声明を後日提出しました（抗議文については、別稿参照）。そして、会の活動を一層強化していくことを確認しました。

非核平和の集いは定員100人の会場に150人も入りきれない位の参加者で、脱原発に対する市民の関心の高さを伺わせました。元東京電力の技術者の木村俊雄さんが「東日本大震災と原発事故から学ぶ！こ



（講演中の木村俊雄さん）

れからの生き方と私たちが今すべきこと」と題して講演しました。

木村さんは、2000年に東電を退職するまで、柏崎刈羽や福島第1原発で炉心運転設計業務に従事して

きました。1991年10月に福島第1の1号機タービン建屋の地下で海水が漏洩し、非常用ディーゼル発電機が水浸しになる事故を経験。津波により電源を喪失し過酷事故に至る

恐れを上司に話すと、その上司は、津波による過酷事故を想定するのは安全審査をやっている者の間ではタブーだと返事をしたといいます。

木村さんは、使用済みの燃料の処分方法も決まらない原子力に明日はないと東電を退職し、福島で自給自足生活を目標していたところ、原発事故で避難を余儀なくされ、現在は高知県土佐清水市で不耕起農法やソーラー発電事業などに取り組んでいます。

木村さんは、原発が火力発電と比べてエネルギー効率が半分以下の32%程度しかないこと、さらに電気がガスと比

べてこれまた半分程の熱効率であることを指摘しました。

また、こうした原発による電気を使うほど核兵器に転用可能な毒物が作られ、核兵器生産のサイクルに加

担してしまふ事実と負の遺産をつくっていることを指摘しました。

さらに、家庭用電気料金制度である「総括原価方式」では、レイトベイス（電力事業を行うのに必要な資産）に電力会社の儲け率を掛けて事業報酬が算出されるので、事業報酬を大きくするために、必然的にレイトベイスを大きくすること、より巨大・巨額な原発をつくることにつながっていく。そして銀行はその資金を融資することにより、利益を上げている。こうしたからくりを見抜くことの大切さを強調しました。

そして、原発が悪い、電力会社が悪いと責める行動も必要なのかもしれないが、自分はどのような生活をしているのかと言われたときにしっかりと答えられるような生活を（木村さんは）しつつある、と述べられ、一般家庭でも設置できるソーラーパネルを使ったシステムについても説明されました。

最後に脱原発・脱電力のためにも電気に依存した生活を、各人が、特に若い人たちが改めることを訴えられました。

会場は満員の熱気



感想 非核平和の集い

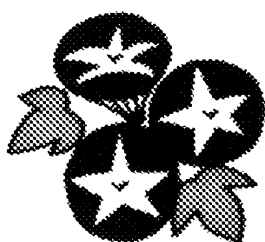
谷 さゆり

講演者の木村さんは朝日新聞の『プロメテウスの罠』にも登場され、10年前までは福島原発の炉心運転設計業務に携わっておられ、原発事故についての話が聞けるかとの期待から150名もの参加があった。

原発については、テレビ放映された木村さんを追うドキュメントのDVDが15分映されたが、講演はもっ

ばら現在なさっている不耕起栽培農業とソーラー発電事業についてだった。高知県・土佐清水に避難されて住み着き、子育てしながら不耕起栽培農業に打ち込み、時には全国に講演や太陽光発電システム設置のために出向かれる日々の話だった。

一番印象に残ったのは、『原発をなくすためには各人が消費電力を減らすこと』と言われたことだった。原発は作れば作るほど、どんなに費用が高くついても電力会社は儲かるシステムになっているらしい。発電しても売れなければ原発を増やすことはできないから、各家庭が消費電力を減らすことが原発をなくす道としては一番効果的と言われたことが納得できた。ちなみに各家庭でもよく使われている電気ポットを全廃すれば、それだけで原発5基は止められるとのことだった。



非核平和の集いのアンケートから

☆はじめに

木村俊雄さんの講演の感想と非核平和についてのご意見を聞きました。25通の回答をいただきました。講演の理解度については、「リアルな話で分かりやすく、勉強になった。」(44歳男性)など、ほとんどがよく分かったというものでしたが、中には「専門家にしか分からない話で理解できなかった。」(79歳男性)など難しく感じたという方もおられました。全員の方々に理解いただけるよう講師との事前打ち合わせを工夫すべきと思いました。

☆主なアンケート内容

- ・オール電化は電力会社の陰謀です。私もガスでご飯を炊いています。太陽光発電は近い内に買いたいです(62歳女性、63歳女性)
- ・「ソーラー発電を自作でしてみたい。」(47歳男性)
- ・今までの生活をしていたら原発は止まらないというのは、まさにその通りです(69歳男性)
- ・今日の話をもとに脱原発のための理論武装に役立てたい(59歳女性)
- ・電気料金のからくりや自然エネルギー普及にはバッテリー技術がポイントだと分かりました。食とエネルギーを自給することは大切ですね(60歳女性)
- ・今日の講演はパンフになりませんか、広げたい(80歳男性)
- ・本会が3・11まで原爆しか対象にしていなかったようで残念です(77歳男性)

〈原子力基本法の改訂に抗議（総会決議）〉

原子力基本法の基本方針に「安全保障に資する」と加えた改正に 抗議し、その削除を求める

原子力規制委員会設置法案が、法案を提出した自民・公明・民主3党と国民新党などの賛成多数により、6月20日の参議院本会議で可決、成立した。同法案の修正協議過程では、自民党の提案により原子力利用の目的として「我が国の安全保障に資する」との文言が盛り込まれ、さらにその附則によって原子力基本法の一部が以下のように改められた。

第二条 原子力の研究、開発及び利用は、平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に、自主的にこれを行うものとし、その成果を公開し、進んで国際協力に資するものとする。

2 前項の安全の確保については、確立された国際的な基準を踏まえ、国民の生命、健康及び財産の保護、環境の保全並びに我が国の安全保障に資することを目的として、行うものとする。

宇宙基本法の目的に同様の「我が国の安全保障に資する」との文言が加えられたことによって、これまでの宇宙の平和利用のみならず軍事利用に道を開いたことに照らせば、このたびの原子力基本法改正は原子力の軍事利用を可能にするものであり、わが国の原子力政策のみならず安全保障政策を一変する危険性を孕んでいるといわざるを得ない。

かつての自民党政権は日本国憲法のもとでも核兵器保有は可能であるとしてきた。しかも、わが国が核兵器製造に必要な技術もプルトニウムも既に有することは、国際社会の知るところでもある。

原子力の軍事利用への歯止めでもあった原子力基本法を改めることが国際社会に与える懸念の大きさは計り知れない。

しかも、原子力基本法の重要な規定を、それ自体正面から審議することなく改めることは、許されるべきではない。

わが国は広島・長崎の原子爆弾被爆に加え、第五福竜丸をはじめとするビキニ環礁での水素爆弾実験被曝、そして昨年の東日本大震災にともなう東京電力福島第一原子力発電所の事故による被曝と四度にもわたって原子力の被害を被ってきた。それ故に、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニを全人類の上に繰り返すまいとして、核兵器廃絶を求める国民的運動が推し進められてきた。非核の政府を求める奈良の会も、そうした国民的願いを実現すべく、核兵器廃絶と核兵器に依存した安全保障政策の転換を求めてきた。

今回の原子力基本法改正は、こうした国民的願いに逆行するものであり、断じて許すことはできない。

原子力基本法の基本方針に「安全保障に資する」と加えた改正に抗議し、その削除を求める。

2012年7月7日

非核の政府を求める奈良の会総会

抗議文の送付先

衆・参各議長 内閣総理大臣 経産大臣 文科大臣 原子力行政担当大臣 民主党 自民党 公明党 国民新党各政党本部 へ抗議文を送りました。奈良のマスコミ各社へその旨報告しました。

（参考）原子力基本法について

原子力の研究と開発、利用の基本方針を掲げた法律。1995年12月成立。科学者の国会といわれる日本学術会議が主張した「公開・民主・自主」の三原則が盛り込まれている。原子力船むつの放射線漏れ事故（74年）を受け、原子力安全委員会を創設した78年の改正で、基本方針に「安全の確保

を旨として」の文言が追加された。今回さらに、原子力規制委員会設置の付則で基本法が変更され、国会での議論もないまま、「我が国の安全保障に資することを目的として」の文言が追加された。「安全保障」の定義は明確ではなく、将来的に核の軍事利用につながる懸念がある。

「さようなら原発10万人集会」

京都からも

さようなら原発



7月16日東京代々木公園で開かれた「さようなら原発10万人集会」(参加者17万人)に連帯して、奈良でも同日、JR奈良駅前で300人が参加して集会がもたれました。主催は「いのちから原発を考える奈良県連絡会」。この連絡会には非核の政府を求める奈良の会も参加しており、

集会の進行を私が務めました。奈良のうたごえのみなさんによる福島原発事故被災者の詩による「つぶてソング」の演奏で開幕し、参加者のアピールの後、大飯原発を再稼働させた関西電力への申し入れ書を採択し、関電奈良支社前を通るパレードを行いました。35度の炎天下にもかかわらず、参加者は暑さを吹き飛ばすあつい思いで一緒に歩きました。7月16日は67年前、アラモゴードで人類初の原爆が炸裂した日。原爆と表裏一体の原発を考えるのにふさわしい日でもありました。

今 正秀 (事務局長)



ひとり言川柳

日の丸を背負ってロンドンが燃える
ヒロシマという教科書を知らないか
金曜日の音は波長がうつくしい

よし子



(お知らせ) ~次回非核平和の集い~

「原発と原爆—日本の核兵器開発計画—」

広島市立大学 広島平和研究所教授 田中 利幸氏

・日時 12月1日(土)午後1時半(予定)

・場所 県中小企業会館

「原子力平和利用」のアイデアの推進、その結果としての被爆者・被災地、平和運動の「核の平和利用」についての認識、反核と反原発運動の分離などを批判的に検討し、日本の核エネルギー政策が、最初から、いかに「核兵器製造能力開発・維持」政策と一体になっていたのか、なぜ3・11以後も日本政府はこの方針を変えようとしなかったのか……。(詳細は次号で)

☆活動日記

- 5月30日 第148回常任世話人会
- 6月21日 事務局会議
- 7月7日 総会・非核平和の集い
- 7月25日 第149回常任世話人会

☆今後の予定

- 8月28日 事務局会議
- 9月19日 常任世話人会
- 12月1日 非核平和の集い

編集後記

残暑お見舞い申し上げます

この25年間、たゆまず発行されてきた「奈良非核ニュース」100号を記念して、沢山の原稿をいただき、感謝にたえません。記念号はいつもの3倍の紙面となりました。表題のない原稿には時間の都合上編集者の責任で題を付けましたことをご容赦下さい。いつも編集者は1人ですが、今回は2人で担当いたしました。

引続き『100号記念に寄せて』の原稿を募集しておりますので、ご投稿下さい。

新たな気持ちで200号をめざし、たく一層のご支持ご鞭撻をお願い申し上げます。(岡谷・吉田)